

ダニエル書 - 第六十二号

ウィリアム・ミラーの預言的ビジョンの宝石を解き明かす：『大いなる光』からのアドベンティズムの逸脱の批判的考察と、真の土台への回帰の呼びかけ

Jeff Pippenger

2024-01-26

ウィリアム・ミラーの夢の宝石は、ミラー派の歴史において輝いていたときよりも十倍も明るく輝くであろう。彼らの歴史の中で増し加えられた知識に関するミラー派の理解は正確ではあったが、不完全であった。その理解をより正確な歴史的枠組みに置くと、より重大な含意が明らかになる。というのも、それは宝石によって表されている予言の真理を広げるだけでなく、終わりの時代の十人の乙女に対する試験ももたらすからである。ミラー派の理解は、二つの先駆者の図表（1843年と1850年）に示されている。両方の図表は、ハバクク書2章で預言された「表」の成就であった。しかも、それらの図表がハバククの成就であったこと、そしてまさにそれらの真理がアドベンチズムの基礎的真理であったことは、「預言の霊」によってそのように認められている。

1844年10月22日の大失望の後、ミラー派が天の聖所と聖所に関連する諸真理の理解へと導かれたことによって、いくつかの基礎的真理の理解は、いっそう輝きを増した。しかし、1856年にアドベンティズムがラオデキアの状態へと移行し、1863年に「七つの時」を最終的に退けたことは、彼らをラオデキアの荒野へと導いた。1850年代以降、アドベンティズムから新たに重要な真理がもたらされたことはない。その主張を疑うなら、なぜそれが誤りなのかを示しなさい。

ミラー派はダニエル書2章の理解に関しては正しかったが、その理解は限定的だった。アドベンティズムはミラー派の理解を超えることはなかった。今日では、ダニエル書2章に表されている八つの王国のすべてを見て取ることができ、また、ネブカドネザルの夢の秘密を悟るために祈るダニエルの象徴も同様に見て取れる。その秘密は最終的な預言の秘密を表しており（すべての預言者は終わりの日々を指し示している）、その最後の預言の秘密こそ、ヨハネが「イエス・キリストの黙示」と呼ぶものである。その秘密は「時が近い」とき、すなわち恩恵期間が閉じられる直前に封印が解かれる。そして、その秘密はいま、見ようとする者たちには解かれつつある。

「ダニエル書」における「the daily」に関するミラー派の理解は、靈感によって正しいと認められていたが、1901年にはアドベンチズムはその根本的な真理を退ける過程に踏み出し、1930年代までには「the daily」がキリストの聖所での奉仕の何らかの側面を表すと主張する、古いプロテスタントの見解へと逆戻りしていた。そのサタン的な見解は、「預言の霊」によれば、「天から追放された天使たち」から来たものである。今日では、「the daily」に関する正しいミラー派の見解は、異教の象徴であるだけでなく、真理を愛さない者たちに強い迷妄をもたらすアドベンチズムの反逆の象徴としても見る事ができる。

ミラー派は二千三百年の満了の正確な期日に導かれ、大失望の直後にはアドベンチズムはその預言に関連する増し加わった光を認めた。だが、1856年から1863年にかけて「七つの時」を退け、さらには今日に至るまで、彼らは自分たちの中心の柱であり土台だと主張する教理からは、より進んだ光を何一つ見ていない。今日では、「七つの時」は（見る意志のある人には）二千三百年の預言のあらゆる期間と直接結び付いていると見ることができる。

最初の四十九年は、七年ごとに土地を休ませるという周期が七度繰り返されることを表している。四百九十年は、古代イスラエルに対する猶予の期間を示すだけでなく、土地を休ませるようにとの命令に背くことがどれほどの年数続けば、土地が休むことを妨げられた年数の合計が七十年に達するのをも示している（それはまさに、その背きのゆえの捕囚の期間である）。キリストが契約を堅くされた一週は、十字架に至る三年半と十字架の後の三年半で構成されている。その一週においてキリストはすべての人を引き寄せておられた。というのも、もしご自身が上げられるなら、すべての人を自分のもとに引き寄せると言われたからである。

今こそ、この世の裁きが下される。今、この世の君は追い出される。そして、わたしが地上から上げられるなら、すべての人をわたしのもとへ引き寄せる。ヨハネ 12:31、32。

キリストが契約を確認し、人々を御自身のもとに集められた二千五百二十日は、神が契約をめぐる争いのゆえに反逆する民を散らされた二千五百二十年を表している。イスラエル北王国に対して行われた「七つの時」は、紀元前723年に始まり1798年に終わる二千五百二十年の離散を表していた。538年はこの二つの期間を分け、連続する千二百六十年の二期間を生み出す。第一の期間は異教による聖所と軍勢の踏みにじりを表し、第二の期間は教皇主義によって行われた踏みにじりを表す。

「七つの時」、すなわち紀元前677年に始まり1844年に終わる南王国に対する二千五百二十年は、1844年10月22日に満了した。それは契約の呪いの象徴であり、贖罪日に吹き鳴らされるはずのヨベルのラッパの響きによって締めくくられた。1844年10月22日に始まった反型的贖罪日は、一つの期間を表している。それは調査審判の期間であり、その期間中、七の聖なる周期に関連するヨベルのラッパが吹き鳴らされるべきであった。

しかし、第七の御使いの声が響き、彼がラッパを吹き鳴らし始めるとき、神の奥義は成就する。神がそのしもべである預言者たちに告げられたとおりである。黙示録 10:7

1844年10月22日に始まった第七のラッパの吹鳴は、レビ記25章に述べられているとおり、聖なる七の周期におけるヨベルの角笛を表している。ミラー派は、二千三百年の預言の年代比定について、最終的には正しかった。大失望の直後に、アドベンチズムはそのことについてさらに理解を深めた。しかし、ミラーの「宝石」である二千三百年の期間は、今日では十倍も明るく輝いている。二千三百年の期間に示されている七つの期間のあらゆる予言的特徴は、レビ記25章と26章の二千五百二十年（「七つの時」）と直接的な予言的関連を持っている。

ミラー派は、背教的プロテスタント主義とカトリックが、「『自らを高め』『倒れた』『あなたの民を略奪する者たち』はアンティオコス・エピファネスの象徴である」と主張したことを退け、彼らは正しかった。彼らは、神の預言の言葉において「あなたの民を略奪する者たち——すなわち幻を確立した者たち」として表されているのはローマであり、幻を確立したのは、名も知れず歴史的に取るに足らないシリアの王ではないという真理を知り、それを擁護した。

今日、アドベンチストの神学者たちは、「robbers of thy people」はアンティオコス・エピファネスであると教えている。今日、ミラー派の歴史において唱えられた、退けられつつあったかつての契約の民はその幻を理解しておらず、また理解することもできなかったという議論（これは「robbers of thy people」を正しく理解することによって立証される）が、再び退けられつつあるかつての契約の民自身によって、再び繰り返されている。

啓示がないところでは、民は滅びる。しかし、律法を守る者は幸いである。箴言
29:18.

ミラー派は、レビ記26章の二千五百年（「七つの時」）が、聖書における最長にして最後の時の預言であると正しく教えたが、ラオデキア的アドベンチズムは1863年にその「宝石」を退けた。そして今日、（見ようとする者には）、ミラー派が「七つの時」を聖書における最長の時の預言として特定したことが正しかっただけでなく、「呪い」、すなわち神の怒りがイスラエルの北王国と南王国の双方に下されたことも分かる。

今日、ダニエル書（他の預言者も同様に）が扱うその二つの憤りのそれぞれの結末は、四十六年という期間の両端（最初と最後）として見て取れる。これは、キリストがミラー派の神殿を建てられた時であり、荒れ野の幕屋を建てるための指示を受けるためにモーセが山にいた四十六日に象徴され、また、ヘロデによる神殿改築の四十六年にも象徴されている。後者については、商人や両替人によって「破壊された」神殿を彼が清めるという意味での「復活」、さらに四十六本の染色体で造られた彼の人間の神殿の復活について、キリストとのやり取りの中でパリサイ人が言及した。今日、ミラー派の基礎的真理は依然として正しいが、今ではその深みは十倍に増している。

今日（見ようとする者には）、キリストがダニエル書8章13節でご自身をパルモニ（不思議な数える者、または奥義を数える者）として示されたとき、2,300年の期間を表す一つの幻と、2,520年の期間を表すもう一つの幻との関連を提示しておられたことが分かる。これら二つの預言的期間の関係が認識されると、それらが教皇支配の1,260年と直接結びついていることが見て取れるが、これはさらに、ダニエル書12章の1,290年および同節の1,335年とも結びついている。

ダニエル書8章13節と14節の二つの幻に結びついた預言的な期間の直接的な関連はさらに多く存在するが、それらは見ようとする者にしか認められない。だが今日、二つの幻によって結び合わされたすべての諸期間の関連を越えたところに、パルモニ（「驚くべき数える者」または「秘められた事柄を数える者」）という名の啓示がある。ミレライトたちはその二つの節については正しかったが、限界があり、今日のアドベンチズムは単に全くの暗闇の中にある。

立ち止まり、驚け、叫べ、叫べ。彼らはぶどう酒によってではなく酔い、強い酒によってではなくよろめく。主は深い眠りの霊をあなたがたに注ぎ、あなたがたの目を閉じられた。すなわち、預言者たちとあなたがたの指導者、先見者たちを覆われた。すべての幻は、あなたがたにとって、封印された書物のことばのようになった。人々がそれを学のある者に渡して、「どうかこれを読んでください」と言うと、彼は言う、「読めません。封印されているからです。」また、その書物を学のない者に渡して、「どうかこれを読んでください」と言うと、彼は言う、「私は学がありません。」イザヤ書 29:9-12

ホワイト姉妹は、ウィリアム・ミラーが黙示録について「大いなる光」を与えられたと指摘しているが、彼の黙示録第12章、第13章、第17章、第18章に関する理解は、端的に言えば、正しくなかった。そうした誤った理解は二つの聖なる図表には示されていないが、黙示録第9章から図表に示されているものは、イスラムが三つの災いによって象徴されているという「宝石」である。

説教者も信徒も、ヨハネの黙示録を、聖書のほかの部分に比べて不可解で、重要性の劣るものと見なしてきた。しかし私は、この書は、まさに終わりの時代に生きる人々の特別な益のために与えられ、彼らが自分たちの真の立場と義務を見定めるための導きとなる啓示であることを見た。神はウィリアム・ミラーの思いを預言へと向け、黙示録について大いなる光を彼に与えた。『Early Writings』 231.

ホワイト姉妹の著作における「大いなる光」という表現は非常に示唆に富んでいる。ミラーは、聖なる天使たちがこれらの主題について彼の心を「導いた」ため、黙示録の教会、封印、ラッパを理解していた。ミラーに与えられた「大いなる光」は二つの聖なる図表に表され、その「大いなる光」であった教理的な真理は、彼の夢の中で「宝石」として示された。アドベンチズムはその「大いなる光」を与えられたが、1863年から偽の宝石でそれを覆い隠し始めた。「光」の原則とは、「光」こそがキリストが人または民を裁く際に用いる基準であるということだ。

「光」は民を裁くばかりでなく、彼らが抵抗しなければ（1856年にそうしたように、これは多くの例の一つにすぎないが）持ち得たはずの「光」もまた同様である。「光」に関連するもう一つの特徴は、拒まれた「光」がそれに対応する程度の闇を生み出すということである。アドベンティズムは、アドベンティズムの基礎を表す、神がミラーに与えた「大いなる光」を拒み、覆い隠した。

表面の下を見通し、すべての人の心を読み取る方は、『大いなる光』を与えられた者たちについてこう言われる。『彼らは自分たちの道徳的・霊的な状態のために、悩み、驚くことがない。まことに、彼らは自分の道を選び、その魂は自らの忌むべき行いを喜んで、わたしもまた彼らの惑わしを選び、彼らの恐れを彼らの上にもたらず。わたしが呼んだとき、答える者はなく、語ったとき、彼らは聞かなかつたからである。むしろ、彼らはわたしの目の前で悪を行い、わたしの喜ばないことを選んだ。』『神は彼らに強い惑わしを送り、彼らが偽りを信じるようにされる』。それは、『彼らが救われるための真理への愛を受け入れず』『不義を喜んだからである。』イザヤ書 66:3, 4; テサロニケ人への第二の手紙 2:11, 10, 12.

天の教師は問いかけた。「実際には世的な方策に従って多くの事柄を進め、エホバに対して罪を犯していながら、自分は正しい土台の上に建てており、神が自分の行いを受け入れておられると装うことほど、これほど人の心を惑わす欺きが他にあるだろうか。ああ、それは大いなる欺き、魅了する惑わしであって、『かつて真理を知った』人々が、敬虔のかたちをその霊と力と取り違えるとき、また、実際にはすべてを必要としているのに、自分は富み、財を増し、何一つ欠けるものはないと思いつくときに、人の心を支配するのである。」『証言』第8巻、249、250頁。

アドベンティズムは1856年にラオデキアと化した。そのラオデキアは、かつて「大いなる光」を与えられたものの、テサロニケ人への手紙第二の「強い惑わし」を受ける運命にある者たちを表している。彼らは、偽の貨幣や宝石を持ち込むことによって自ら築き上げた偽りの土台が神に定められたものだとして常に信じているが、実際にはそれは砂の上に築かれた土台である。アドベンティズムは「大いなる光、豊富な証拠を与えられてきた教会」であるが、「教会」でありながら「主のメッセージ」として「送られた」ものを捨て去り、その後「最も不合理な主張と誤った仮定、偽りの理論」を受け入れてきた。

聖化されていない聖職者たちは、神に敵対して立ち並んでいる。彼らは同じ口でキリストとこの世の神をほめたたえている。表向きにはキリストを受け入れているとしながら、彼らはバラバを受け入れ、行いによって「この人ではなく、バラバを」と言っている。これらの言葉を読むすべての人は、よく心に留めなさい。サタンは自分に何ができるかを誇ってきた。彼は、キリストがご自分の教会にあるようにと祈られた一致を打ち壊そうとたくらんでいる。彼はこう言う。「私は出て行って、できる者を欺くために偽りの霊となり、批判し、断罪し、事実をねじ曲げる。」「大いなる光を受けてきた教会」、すなわち豊かな証拠を与えられてきた教会が、欺きの子、偽りの証人を迎え入れるなら、その教会は主が送られたメッセージを捨て、最も不合理な主張と誤った仮定と虚偽の理論を受け入れるようになる。サタンは彼らの愚かさを笑う。彼は真理が何であるかを知っているからだ。

多くの者が、手にサタンの地獄の松明から火を移した偽りの預言の松明を掲げて、私たちの講壇に立つだろう。疑いと不信が育まれるなら、自分は多くを知っていると思いつく人々のもとから、忠実な牧師たちは取り除かれてしまう。「もしあなたが知っていたなら」とキリストは言われた。「あなたも、少なくともこの日に、あなたの平和に関わる事柄を知っていたなら！
しかし今、それらはあなたの目から隠されている。」

それにもかかわらず、神の土台は堅く立っている。主はご自分のものを知っておられる。聖められた奉仕者の口には偽りがあってはならない。彼は白日のように公明正大で、あらゆる悪のけがれから離れていなければならない。聖められた宣教と出版の働きは、この曲がった世代に真理の光を閃かせる力となるだろう。光を、兄弟たちよ、私たちにはさらに多くの光が必要だ。シオンでラッパを吹け。聖なる山で警報を鳴らせ。聖められた心をもつ主の軍勢を集め、主がその民に何を語られるかを聞かせよ。聞こうとするすべての者に、主はさらに多くの光をお与えになっているからである。彼らを武装させ、装備を整え、戦いに上らせよ。力ある者に対して主を助けるために。神ご自身がイスラエルのために働かれる。あらゆる偽りの舌は沈黙させられる。天使たちの御手が、仕組まれつつある欺きの計略を打ち倒す。サタンのとりでは決して勝利しな

い。勝利は第三天使のメッセージに伴う。主の軍の将がエリコの城壁を打ち倒したように、主の戒めを守る民も勝利し、すべての反対勢力は打ち負かされる。天から遣わされたメッセージを携えてあなたがたのもとに来た神のしもべたちについて、だれひとり不平を言うてはならない。「彼らは断定的すぎる。語り方が強すぎる」と言って、もはや彼らのあら探しをしてはならない。彼らの語り口が強いこともあろう。しかし、それが必要ではないだろうか。人々が主の御声やそのメッセージに耳を貸さないなら、神は聞く者の耳を鳴り響かせるだろう。神は御言葉に逆らう者を断罪される。

「サタンは、私たちという民の中に、私たちが戒め叱責し、誤りを捨てるよう勧めるものが何一つ入って来ないように、取り得るあらゆる手立てを講じてきた。だが、神の契約の箱を担う民はいる。私たちの中から、もはやその箱を担わなくなる者たちが出て行くであろう。けれども彼らは、真理を妨げる壁を築くことはできない。真理は終わりまで、前へ、上へと進んでいくからである。これまでも神は人々を起こしてこられ、いまもなお、御命令を行う備えをして時を待っている人々がいる。締めりのない漆喰を塗りつけただけの壁にすぎない制限をものともせず通り抜ける人々である。神がご自分の霊を人々に注がれるとき、彼らは働く。彼らは主の言葉を宣言し、その声をラッパのように高らかに上げる。真理は彼らの手にあっても、少しも減じたり力を失ったりすることはない。彼らは民にその背きの罪を、ヤコブの家にその咎を示す。」
『牧師たちへの証言』409-411頁。

サタンの象徴である「the daily」をキリストの象徴と見なすことは、同じ口で「キリスト」と「この世の神」を称賛することになる。表向きはキリストを受け入れると公言しながら、彼らはバラバを選び、その行いによって「この人ではなく、バラバを」と言っている。ミラーの夢の中で「宝石」として表され、また二枚の聖なる板の上に図示された真理は、ミラーに与えられ、アドベント主義が拒んだ「大いなる光」である。

彼らはサタンの象徴を用いてキリストを賛美していると称し、自分たちは神の土台の上に立っていると主張するが、それは偽りの土台であり、その欠陥のある教理的構造の上に立つ者すべてに強い惑わしをもたらす。日の下に新しいものは何もなく、現代のイスラエルは単に古代イスラエルの預言的な足跡を辿っているにすぎない。

私の魂を重くしていることが一つある。すなわち、神の愛の甚だしい欠如である。光と真理に対する継続的な反抗のゆえにその愛は失われ、また、重ねられた証拠を前にしながらも、神がお遣わしになったメッセージの働きを打ち消そうとして影響力を及ぼしてきた、活動的に働いてきた人々の影響によっても、そうになっている。私は彼らにユダヤ民族を指し示して問いかける。私たちは、猶予期間の終わりに至るまで、盲目的な反抗の同じ道を、私たちの同胞に歩ませたままにしておかなければならないのか。もしかつて、沈黙を守らず、昼も夜も叫び、神が与えられた警告を響かせる、真実で忠実な見張り人を必要とした民があったとするなら、それはセブンスデー・アドベントである。大いなる光と祝福された機会を与えられ、特権という点ではカペナムのように天にまで高められてきた者たちが、与えられた光の大きさに見合う暗闇へと、活用しないがために、置き去りにされてしまうのだろうか。

私は、総会に集う私たちの兄弟姉妹に、ラオデキヤの人々に与えられたメッセージを心して受け止めるよう、切に訴えたい。なんという盲目の状態であることか！この主題は繰り返しあなたがたの注意に上ってきたが、あなたがたの霊的状态に対する不満

は、改革をもたらすほど十分に深く痛切なものではなかった。「あなたは言う、『私は富んでおり、財を増し、何一つ必要としていない』。しかし、自分が惨めで、衰れで、貧しく、盲目で、裸であることを知らない。」私たちの教会は自己欺瞞の罪を負っている。多くの者の宗教生活は偽りである。『Manuscript Releases』第16巻、106、107頁。

「カペナウム」は、イエスがご自分の町として選ばれた町であった。

カペナウムでは、イエスは各地を行き来する旅の合間に滞在され、そこは「ご自分の町」として知られるようになった。そこはガリラヤ湖の岸辺にあり、ゲネサレの美しい平原の境に近く、実際にその平原の上に位置していたのかもしれない。The Desire of Ages, 252.

キリストは、かつてエルサレムを選ばれたように、カペナウムを選ばれた。

また、わたしは彼の子に一つの部族を与えよう。わたしのしもべダビデが、わたしが自分の名をそこに置くために選んだ都エルサレムで、いつもわたしの前に灯火を持つためである。列王記上 11:36

キリストは1844年にアドベンチズムをご自身の都として選び、1863年までに、アドベンチズムは「エリコ」という都を再建した。そこは、ラオデキア的な安逸と裕福さの象徴である。古代イスラエルにそうであったように、現代のイスラエルにおいても同様である。アドベンチズムは自分たちが神の特別な都の市民だと信じているが、その市民権の証拠を与える「大いなる光」を退けてしまった。エリ、ホフニ、ピネハスの時代のシロのように、アドベンチズムは、受け取る機会が与えられていた「大いなる光」に従って裁かれるだろう。

神の子と称する者たちの間で、どれほど忍耐が乏しく示されてきたことか。どれほど多くの辛辣な言葉が語られ、私たちの信仰に属さない者たちに対してどれほど多くの非難が発せられてきたことか。多くの者は、主がそのようにご覧になっておられないのに、他の教会に属する人々を大きな罪人と見なしてきた。他の教会の信徒をこのように見る者たちは、神の力強い御手の下にへりくだる必要がある。彼らが断罪する人々は、わずかな光しか与えられず、機会も特権も少なかったのかもしれない。もし彼らが、私たちの教会の多くの会員が受けてきた光を持っていたなら、はるかに速い歩みで前進し、その信仰を世により良く示していたかもしれない。自分の光を誇りながら、その光に歩もうとしない者たちについて、キリストはこう言われる。「しかし、あなたがたに言う。さばきの日には、ツロとシドンのほうが、あなたがたよりもなお受ける罰は軽いであろう。そして、カペナウム [大いなる光を受けてきたセブンスデー・アドベンチスト] よ、あなたは [特権の点で] 天にまで高められたが、地獄にまで引き下ろされるであろう。というのは、あなたの中で行われた力ある業がソドムで行われていたなら、あの町は今日まで残っていたであろうからである。しかし、あなたがたに言う。さばきの日には、あなたよりもソドムの地のほうがなお受ける罰は軽いであろう。」そのとき、イエスは答えて言われた。「天と地の主である父よ、感謝します。あなたはこれらの事を、[自分たちの目には] 賢く思慮深いとする者たちから隠し、幼子たちに現してくださったからです。」

今、主はこう言われる。あなたがたがこれらすべての行いをし、わたしが朝早くからあなたがたに語りかけてもあなたがたは聞かず、わたしが呼んでも答えなかったので、わたしは、あなたがたが信頼している、わたしの名によって呼ばれているこの家と、わたしがあなたがたとあなたがたの先祖に与えたこの所に対して、シロにしたと同じようにしよう。わたしは、あなたがたのすべての同胞、すなわちエフライムの全子孫を退けたように、あなたがたをわたしの前から退ける。

主は私たちの間に非常に重要な機関を設けられたが、それらはこの世の機関が運営されるのと同じようにはなく、神の秩序に従って運営されなければならない。滅びゆく魂があらゆる手段によって救われるよう、ただ神の栄光だけを見据えてそれらを運営しなければならない。神の民には御霊の証しが与えられてきたが、それでもなお多くの者が、戒めや警告、勧告に心を留めていない。

「今これを聞け、愚かな民よ、悟りのない者たちよ。目があっても見ず、耳があっても聞かない者たちよ。あなたがたはわたしを恐れないのか、と主は言われる。海の境として砂を設け、永遠の定めによってそれを越えられないようにしたわたしの前で、おののかないのか。たといその波が荒れ狂っても、打ち勝つことはできず、どよめき叫んでも、それを越えることはできないではないか。しかしこの民の心は背信し、反逆である。彼らは背いて去ってしまった。彼らは心の中で言わない。「今こそ、時にかなって前の雨も後の雨も与え、刈り入れのために定められた週をわたしたちに保ってください。主なるわたしたちの神を恐れよう」と。あなたがたの不義がこれらのものを退け、あなたがたの罪が良いものをあなたがたから差し止めた。……彼らは訴えを裁かない、みなしごの訴えを。にもかかわらず彼らは栄える。貧しい者の権利を彼らは裁かない。これらのことのために、わたしが罰しないでいられようか、と主は言われる。このような国に対して、わたしの魂が復讐を果たさないでいられようか。」

主はこう言わざるをえないのだろうか。「この民のために祈ってはならない。彼らのために叫びも祈りもささげてはならない。わたしに執り成しをしてはならない。わたしはあなたの願いを聞かないからだ」。「それゆえ、にわか雨はとどめられ、後の雨はなかった。……今からでも、わたしに向かって『わが父よ、あなたはわたしの若き日の導き手です』と叫ばないのか」 レビュー・アンド・ヘラルド、1893年8月1日。

次回の記事では、ウィリアム・ミラーに与えられたヨハネの黙示録に関する「大いなる光」の考察を続けます。

「キリストが真の宗教を体現し、人の心と行為を支配すべき原則を高く掲げるためにこの世に来られたとき、偽りは、かつて大いなる光を与えられていた者たちにすでに深く根を下ろしており、彼らはもはやその光を理解せず、真理のために伝統を手放そうという気もなかった。彼らは天の教師を退け、栄光の主を十字架につけてまで、自分たちの慣習や考案物を保とうとした。同じ精神が今日の世界にも現れている。人々は、自分たちの伝統が乱され、新しい秩序がもたらされるのを恐れて、真理を調べることを嫌う。人類には常に誤る危険がつきまとい、人は本来、人間の考えや知識をことさらに高く掲げがちである一方で、神的で永遠なものは見分けもされず、尊重もされない。」 『安息日学校の働きに関する勧告』、47。